ふるさとの誇り 133

博レポート

歴史に光をともす地域の伝承

～飯野・若宮神社のお灯籠祭りとチョウマタギの文化～

夏の青空が茜色に染まるころ、灯籠の明かりが、ぽつりぽつりと灯り始めました。そのやわらかな光に導かれるように、集まってきた人々の声が次第ににぎやかになっていきます。

8月下旬に飯野地区若宮神社で行なわれる「お灯籠祭り」を彩るのは、神社参道に並ぶ「チョウマタギ」とそれに飾り付けられた灯籠です。チョウマタギとは灯籠をつるす門型の木組みのことで、「七五三切（しめきり）」とも、灯籠を雨から守っていることから「雨屋（あまや）」とも呼ばれ、昔は竹で組み立てられていたとの証言もあります。チョウマタギは本殿前から参道上に飯野1区～6区、9区の順で合計7基が並べられます。それぞれのチョウマタギには30丁以上の灯籠が飾り付けられ、暗闇に浮かぶその明かりは、幻想的な世界へ人々を誘います。

ふるさと〇〇博物館ではこの祭りの起源や歴史をひもとくため、山梨県立博物館の民俗を専門とする学芸員とともに調査を行ない、地域の方々にお話を伺ってきました。その結果、それまで地元でも忘れられていたお灯籠祭りとチョウマタギの起源のひとつが、「祇園祭」にあることがわかってきました。祇園祭は、疫病の神とされる牛頭天王を提灯などを飾った華やかな祭りで喜ばせて夏の疫病の流行を防ごうとしたもので、特に江戸時代になると江戸を筆頭に各地で大流行し、日本橋大伝馬町の天王祭など、盛大に行なわれるようになりました。

この歴史にたどりつく有力な手がかりとなったのは、地域の人々が地元の伝承を書きとめた『ふる里飯野の昔話』でした。その中で「お灯籠祭りは祇園祭りと同時に催されていたとも伝えられる。始めは六月に行なわれていたが…」と残されていたことから、お灯籠祭りと祇園祭がつながり、灯籠を飾るチョウマタギの存在が浮かびあがったのです。

さらに地域の人々のお話や資料にあたっていくと、チョウマタギは、芦安の小曽利や古屋敷の祇園祭り、百々の祇園祭り、飯野新田のお灯籠祭り、その他六科や在家塚、西野、甲府市や甲州市でも建てられていたことが分かりました。この調査の中で、地域の人々がチョウマタギを作った大工の方を自主的に調べ、明治時代のチョウマタギを請け負った記録、『大工日記』なども発見されました。

地域の人々が残した資料や人々の記憶、そして、その歴史を自ら調べ伝えようとする地域の姿が、お灯籠祭りだけでなく、市内外に広がる祇園信仰とチョウマタギの文化へ光をあてたのです。

山梨各地で建てられていたチョウマタギも現在は姿を消し、残るは飯野の若宮神社だけになりました。飯野でもかつて祭りを取り仕切っていた青年会の会員が少なくなったことから、昭和40年代半ばにはお灯籠祭りが一時途絶えました。しかし、昭和54年、もう一度お灯籠祭りを復活したいとの有志の声に地域の人々が集い、企画や広告、ステージ設置、配線、司会など、それぞれの得意分野を生かすことで祭りが復活したのです。

灯籠のやわらかな明かりに照らされながら、子どもからお年寄りまでさまざまな人々が笑顔でチョウマタギのトンネルを行き交います。お灯籠祭りを楽しむこと、それが祭りを受け継ぐ原動力なのでしょう。お灯籠は、この地に生きてきた人々の祈りやさまざまな物語を今も照らし続けています。

文／写真　文化財課

①チョウマタギ　飯野3区　西北組
②大伝馬町の祇園牛頭天王祭　『東都歳時記4巻付録1巻』　国立国会図書館蔵　チョウマタギが描かれている
③山梨県立博物館学芸員と地域の方々との調査風景

南アルプス市
ふるさと〇〇博物館
Furusato Maru-Maru Museum
地域情報の提供や調査へのご協力をお願いいたします。
ふるさと文化伝承館　電話:055-282-7408
※ふるさと文化伝承館は、設備の改修工事のため2月まで休館中です。

写真：飯野6区 郷地新居のチョウマタギ